目次

新曲

さの部

西行……六
西行桜……九
栄ゆる宮……一三
嵯峨の秋……一四
嵯峨の春……一六
桜狩……一九
桜川……二三
狭衣……二五
笹の露……二七
里の暁……三一
五月雨……三三
さむしろ……三五

しの部

さらし……三九
残月……四一
四季の遊び……四三
四季の艶……四六
四季の恋……四八
四季のすさび……五三
紀の路の奥四季の段……五六
四季の富草……六一
四季の友……六五
四季の眺……六九
四季の富士……七三
四季の雪……七七
賤機帯……七九

七福神……八八
忍ぶ草……九三
石橋……九六
松蔭の月……一〇一
猩々……一〇三
松上の鶴……一〇七
松竹梅……一一〇
源氏十二段浄瑠璃供養……一一四
新浮舟……一一六
新道成寺……一一八
新七草……一二一
深夜の月……一二四

す の 部

末の契……一二六
末の松……一三〇
須磨の嵐……一三六
墨絵の月……一五〇
墨絵の蘆……一五一
住吉……一五四

せ の 部

清華園……一六〇
関尽し……一六四
関寺小町……一六八
関の清水……一七二

そ の 部

園の秋……一七五
園の詠……一七七

た の 部

玉川（組歌　六玉川）……一八〇
玉川……一八六
高砂その一……一八九
高砂その二……一九〇
竹筏……一九一
玉鬘……一九二
玉椿……一九九
玉の台……二〇一

民の賑……二〇三

ち の 部

地久節……二〇四
竹生島（山田流）……二〇六
竹生島（生田流）……二一二
千里の梅曲……二一五
千歳の春……二一〇
千鳥の曲……二一二
千箱の玉章……二二五
茶音頭……二二〇
千代の寿……二二四
千代の栄……二二七
長恨歌曲……二二九
蝶の夢……二四五

つ の 部

椿尽し……二四七
摘草……二四九
鶴亀……二五一
鶴の巣籠……二五二

て の 部

手習……二五四

と の 部

常磐……二五五
常磐の栄……二五九
友千鳥……二六二
鳥追……二六七
道中双六……二六九

な の 部

長良の春……二七二
那須野……二七六
夏……二八一
夏の曲……二八四
夏の眺め……二九〇
夏やせ……二九二
なでしこ……二九四
名取川……二九六

七草……三〇〇
七小町……三〇二
難波獅子……三〇五
ねの部
根岸の四季……三〇七
子の日……三一〇
子の日の遊……三一三
根引の松……三一四
参考文献……三一七
引用歌・詩・故事・名句索引……三一九
題字……田辺尚雄

〔さの部〕

西行（さいぎやう）

箏　平調子
三絃　二上り

〔大意〕西行法師の和歌を綴り合せ、北面の武士から法師になり、吉野の花を愛でた歌人になったことをうたっている。初代山登松和検校（山田検校門人、文久三年八十二才歿）の作曲になる。

われも昔はますらをの、真弓（まゆみ）、槻弓（つきゆみ）年をへて、ひきたがへたる朝夕は、命なりけり旅衣、苔の衣に身を染めかへて、心の塵（ちり）を袖はらふ、やぼな世界にいとしごの、いとしかはいは昔の事よ、のう、よしの山、よしの山、こぞの栞（しをり）の道かへて、まだ見ぬ花のいろいろを、たづねたづねて歌枕、筆のすさびの墨染ざくら、うつろふ春の花の顔、やせる姿に笠きたなりを、水の鏡にかげとめて、しばし立ち寄る柳かげ。

〔語釈〕〔昔はますらをの〕西行は佐藤義清という鳥羽院の武士で、従五位下、検非違使になった人である。親友、佐藤憲康の急死に世をはかなみ、嵯峨野に出家した。〔真弓〕檀の木で作った丸木の弓。〔槻弓〕槻の木で作った丸木の弓。伊勢物語、二十三段、「梓弓真弓つき弓年をへてわがせしがごとうるはしみみよ」（弓には梓弓、真弓、槻弓と品々あるようにいろ〳〵辛い思をして年月を経て来たが、自分があなたを愛したように、その人を愛しなさい。）。〔ひきたがへたる朝夕は〕ひきたがえるは弓をひきちがえる意を含ませているわけで、朝夕が交替に訪れる。〔命なりけり旅衣〕旅を生命とする。新古今集、巻十、覊旅歌、西行法師、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」（年とって又小夜の中山を越えると思ったか、思はなかった。これもやはり存命していたからだ。）。〔苔の衣〕僧衣。〔心のちり〕